慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	堀江博士著 労働問題の現在及将来
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.12 (1919. 12) ,p.1665(129)- 1667(131)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19191201-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

箕作博士著　フランス大革命史　前篇

富山房發行
定價金五圓

我國に於て西洋史の講究せらるゝこと久しと雖、其の講究の結果の世間に發表せらるゝ所は概ね教科書用若くは教員參考書に充つる一般西洋史に過ぎずして、特別の國民、特殊の時代を取扱ひたる著述に至りては、洵に曉天の星も啻ならず。此程物故せられたる箕作博士の『フランス大革命史』は既刊の前篇のみにても、六六四頁の大冊子なれば、單に量の上より見ても、我が史學界にレコルドをつくるものと云ふを得べし。

箕作博士の佛國革命を研究せらるゝこと極めて久しく、前後二回の西遊を經て、東京帝國大學に同革命史を講せらるゝこと約二十年に亘りしと云ふ。以て其の造詣の如何に深奥なるかを察す可し。博士が佛國革命の研究に如何に多大の興味を有し、又如何に佛國革命に關する知識に對して自信ありしかは、『フランス大革命史』序文に「これら諸先生（ハイデルベルヒ大學のエルドマンスデルフェル教授、ベルリン大學のレンツ教授、パリー大學のオーラール先生）の大革命に關する意見はそれ〳〵獨創に富みて啓發せらるゝ所少なからざりしが、また悉く服する能はざる所あり、一方の實物研究と相俟ちて漸く余一家の革命史觀を成すに至れり」と述べられしに徴して、之を察知するを得べし。佛國革命てふ最も複雜混亂したる時代、驚天動地の大ドラマを演出して後世に影響を與ることの絶大なる史實の研究は言語、傳説、習慣、宗教等を同うする國人に取つても極めて困難なる事業なるにも拘はらず、故博士が人情風俗相距れる異邦人を以てして、かく迄に自信ある大述作を提供せられたるは、誠に我が學界の名譽たるのみならず、又實に世界の史學研究に貢献する所少なしとす可からず。史學者としての天才を異邦人たる博士に期待するは或は望蜀の事に屬す可けむも、吾人が故博士に敬服するは、研究の爲には如何なる努力をも惜まざる學者的態度の眞率なる點にあり。『西洋史講話』に於て、若くは時々發表せられたる史論に於て見る博士の此の眞率なる研究的態度は、フランス大革命史に於て最も多く發揮せられたるを見る可し。而して其の革命の原因を説き、革命の事件を叙するに方つて、邦人に了解し難き制度文物等の説明に最も力を籠めたるは殊に喜ぶ可し。文章亦雄渾にして塊麗、此世界歴史中の最大事件の記述に相應はしきを見る。要するに、本書が我が史學界近時の一大述作なることは、何人も異論なき所ならむ。唯だフランシス二世をレオポルド二世の弟としたるが如き、レオポルド二世をレオポルド五世としたるが如き、一二のケアレスミステーキ若くはミスプリントは白璧の微瑕にだも若かざれど、是等は須らく改版の際校訂を要す可し。（占部百太郎）。

堀江博士著　勞働問題の現在及將來

大鐙閣發行四六版
三三六頁定價金貳圓五拾錢

堀江博士は博士自らの語るが如く、從來勞働問題解決法として、職工組合主義を提唱し來りたるのみならず、近き將來に於ても亦我勞働問題を解決する上に、最も適應したる主義なりとして之を鼓吹せんとしつゝあるものなり。（本書五八頁）。此點に於て博士の抱懷する意見は多年一定して動かず、所謂「勞資協調」の如き茫漠たる名稱の下に主張せらるゝ妥協的政策の如きは

蓋し博士の最も嫌惡する所にして、飽く迄闘爭的職分を有する職工組合を我國に樹立し、大に勞働者の利益を發揚したる後に於て、資本家及勞働者の階級的差別を撤廢す可き時機の到來を促進せんことは博士の期圖する所なり。本著は斯くの如き立場に在る博士が、時勢の要求に促されて、僅々一ヶ月有半の短少なる時日に於て其多年の蘊蓄と絶倫の精力とを傾注して一氣呵成的に脱稿したる所のものなり（卷頭題言）。

博士に據れば勞働問題の解決は勞働者の生活を安定なる狀態に置き、彼等をして最大の勞働能率を發揮し、自己の意思の下に生産に資せしめ、而して之に貢献したる所と均衡を保つ可き富の分配に與らしむるに在り。（二五頁）。即ち博士の期する所は今日の國家組織及現在の社會制度の下に於て、法律上確認せられたる勞働者の獨立を勞働關係の實際に於て實現せんとするものにして、自由競爭及私有財産の制度に基礎を有する現存の社會制度を其根柢より破壞せんとするが如き主張の當否に論及せんとするは博士の目的に非ず、單に勞働者の生活に關係ある社會制度が將來に於ても亦、今日に於けるが如く存續するものと做し、而して是等の制度が如何なる不利なる影響を勞働階級に及ぼすやを考察し、國家的政策又は勞働者の自助的手段を以て如何に之れに當る可きやを論述するに止めたるものなり。（八頁）。此約束を忘れて本書を繙く者は失望せざるを得ず。博士は社會改造の高遠なる理想を說く使徒に非ず、亦無産者階級勝利の將來近きを叫ぶ激烈なる豫言者にも非ず。唯だ「日本橋々下の水が、遠くテームスのそれに通ずる」を信じ、歐米先進國に於ける勞働問題の過去及現在に鑑み、或は「我國に勞働問題なし」と稱し、又は「我國に特殊の勞働問題解決法あり」と唱ふる天下最大の愚論に對して挑戰し、以て將來の勞働運動を健全なる方針に就かしむるを以て其任務とするものなり。斯くて博士は職工組合主義に對する頑冥なる反對論に答へて組織なく統制なき勞働運動の危險を說き（特に八七—八頁參照）、國家は須く職工組合の成立、成立後の運動、將來に於ける維持に就き、總て其障害たる可きものを除き、便宜と爲る可きものを與ふるの方針に出でざる可らざるを力說せり（三二四頁）。而して博士が勞働問題解決の目標は實に資本家と勞働者との境界を撤廢するに存するものなり（三二二頁）。

本著に據りて博士の意見を批判し、溫和に過ぐとなす少數の過激論者が社會の一隅に存することは尙ほ社會進步に對する一種の刺戟として之を許す可し。博士の所論を以て過激なりとして之を喜ばざる固陋なる政治家及資本家が社會の表面に儼として存在するに至つては國家社會に取りて最大なる危險事なり。流麗清澄極りなき博士の文章が頑迷者流の謬論に激して萬丈の怒濤と化するの所、我言論界近時の壯觀たらずんばあらず、博士は「一人にても勞働者又は勞働運動に從事する人々の間に贊成を得て、將來の勞働運動を健全なる方針に就かしむるを得るを得れば、即ち余の望み足れり」と稱するも、吾人は博士が其思想感情の如き顧みるに値せずと稱したる「妥協曖昧を事とする官僚、勞資協調なる美名に借して、暴利を逞うする資本家」に對しても亦、特に本書に參して其蒙を啓き勞働問題解決の眞光明に接せんことを希望して止まざるなり。（高橋誠一郎）